義のために
迫害されることを恐れず

マタイ5章10～12節
2022年1月16日
松田 基子 師

神様は、何故、独り子を人の世にお遣わしに、ならなければならなかったのでしょうか。 それは何よりも、
『人類の**罪を贖い、救われる**ため』
でありましたが、もう一点は、
人間に、神様の御心が分からない、
伝わらないために、
『神様の**真の御心**を、**人間に伝える**ため』
神様は御子イエス・キリストをこの世界に人の子としてお遣わしになりました。

そこで、イエス様は、神様の愛の御心を、世に表そうと、公生涯に立たれました。 ガリラヤ湖畔の町、カファルナウムを宣教の拠点にして、福音を宣べ伝え始められました。 ガリラヤ湖の漁師、ペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネを、弟子に招かれると、彼らはイエス様に従いました。 その後、イエス様は弟子達を連れて、
マタイ4章23節から25節を見ますと、
「**イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。 そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。 人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。**
こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った」
とあります。

ここに記されていますように、イエス様の周りに集まって来た人々と言うのは、当時の医療からは、見捨てられ、社会の底辺に追いやられて、絶望の中にいた人々でした。
ユダヤ教という、律法社会からは、彼らは律法を守っていませんでしたから、
『神様の祝福の外に置かれている』
と考えられていた人々です。 律法社会からは、相手にして貰えない人々でした。
しかし、イエスさまは、
『神様の愛は、彼らに**こそ注がれ**ており、
神様は彼らを**求めて**おられる。』
その事を、**彼らが受け入れる**ために、
神様の愛を語り、その**証に**、彼らを**癒された**のでした。

マタイ5章1節には、
「**イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄ってきた。 そこで、イエスは口を開き、教えられた**」
とあります。 山に上って教えられたところから、【山上の説教】 と呼ばれています。 イエス様はこのところで、人間が考える考えとは、全く逆のことを語られました。 私たちが、決して喜べない情況について、
『幸いである』
と宣言しておられます。 イエス様は、明らかに、この世の価値観と神様の御心である、天の**価値観との違い**を、教えようとしておられました。

イエス様は、神の子の位を捨てて、人の子となり、その身に全人類の罪を一身に負って、身代わりの十字架に架かって、人類の罪を贖われるのですが、何と、神の御子のイエス様を、十字架につけたのは、
『自分たちこそ、神様の御心を知り、
神様の御心を行っている』
と、思い込んでいた、宗教指導者たちと、この世の権力者である、ローマ総督でした。

宗教家も、また、自分を絶対化します。 神様の名を使って、自分の考えを正しいとするのです。 律法学者やファリサイ派の人々は、幼い時から律法を学び、律法を規範にして、生きる事に、人生を賭けて来ました。 それだけに彼らには、律法の**優等生という自負**がありました。
『自分たちこそ、神様に選ばれた者だ
と言うプライドがありました。』

彼らはイエス様に対して、
「**ナザレから何のよきものがでようか**」
と人間的な判断を下し、イエス様の中に、神様の御心を読み取る、謙遜さはありませんでした。
彼らは最初から偏見と言うメガネで、イエス様を見、イエス様を、
『律法違反者、神様を冒涜する者』
に仕立て上げて行くことに、熱心になりました。

そのために、彼らは何時も、イエス様を監視しました。 マタイ15章を見ますと、1節に、
「**そのころ、ファリサイ派の人々と律法学者たちが、エルサレムからイエスのもとへ来て言った。**
『なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言い伝えを破るのですか。 彼らは食事の前に手を洗いません。』」
ここで、手を洗うと言うのは、衛生上の問題ではなくて、
『宗教上の清めの儀式を守っていない』
と断罪しているのです。 それに対して、
イエス様は15章7節から9節に、
「**偽善者たちよ、イザヤは、あなたたちのことを見事に預言したものだ。 この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから、遠く離れている。 人間の戒めを教えとして教え、空しくわたしを崇めている**」
と言われました。

彼らのその結果が、イエス様を、神の御子メシアと認めず、十字架につけたのです。 人間には、このように、神様の御心が分からないのです。 と言うよりも、
『神様の御心に聞こうとしない、
神様の御心そのものであられる
イエス様に、聞こうとしないのです。』
イエス様はそのことを十分ご存知で、弟子達に、神様の御心を示され、**この世の価値観は、天の価値観の前に、皆消し去られる**ものである故に、ただ、天を見上げ、 天の価値観に生き抜く事を、山上の説教で教えられました。

5章10節に、
「**義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである**」
と言われました。 ここでの義は、神様との正しい関係を意味しています。 人間が神様との正しい関係に回復するために、イエス様は、人としてこの世に生まれ、人類の神様に対する背きの罪を一身に負って、身代わりの十字架に架かって下さるのです。 人は自分の正しさでは、けっして神様に良しとされて、天の国へ迎えられることはありません。 自分で自分に、合格点を付けていた宗教家たちには、そのことが分かりませんでした。

罪ある人間は、イエス様の十字架の贖いを信じて、イエス様の執り成しによって、神様に赦され、天の国に迎え入れられるのです。
人間の永遠の存在保証は、唯ここにしか、有りません。 しかし、神様の御心を、イエス様を通して知ろうとしない、心頑なな人間は、この高価なイエスさまによる神様の御心の招きを、信じようとはせず、自分を絶対化して、イエス・キリストを信じる者を迫害するのです。

イエス様は11節で、
「**わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである**」
と言っておられます。 こんなことは地上の価値観からは、とても幸いだとは思えません。 ところがこの事は、初代教会に生きた、ペトロたちにとって、現実となりました。

ペトロⅠの手紙3章14節から、
「**義のために苦しみを受けるのであれば、幸いです。 人々を恐れたり、心を乱したりしてはいけません。 心の中でキリストを主と崇めなさい。 あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。 それも、穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明するようにしなさい。 そうすれば、キリストに結ばれたあなたがたの善い生活をののしる者たちは、悪口を言ったことで恥じ入るようになるのです**」
と教え勧めています。

日本においても、戦時中、キリスト教は敵国の宗教として、頭から否定されました。 信仰によって、イエス・キリストを神とし、天皇を神としなかった牧師たちは、投獄されました。 獄死をされた牧師もいます。 そのような中に置かれると言う事は、生身の人間として耐え難い事です。
それなのに、イエス様は12節で、

「喜びなさい、大いに喜びなさい。 天には大きな報いがある。 あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである」

と言っておられます。

イエス様だけが、天の国の栄光をご存知です。 イエス様は、

「天には、大きな報いがある」

と、その実体をご存知なので、やがての日にはそれは得ることが出来、その喜びは、地上の迫害の苦しみを拭い去って、余り有るものである事をご存知なのです。 イエスさまは、ご自身を信じて、従って来る人々に与えられる恵の大きさをご存知なので、皆が、地上の困難な旅路を歩み抜いて、天の御国へ辿り着く事を願っておられるのです。

ところで、イエス様は、全ての人を、天の御国へ招かれましたが、決して安易な招き方はしておられません。 マタイ16章24節で、

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。 自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」

と言っておられます。

ここには、人生を何に賭けて生きるかが問われています。 イエス・キリストを信じて生きることは、この世が、罪の闊歩する世界である以上、信仰者への迫害は避けられません。 私たちはその事を恐れます。 特に私たち日本のキリスト者は、キリシタン弾圧の歴史を負っているので、迫害を恐れていると言われます。

『キリスト教を信じたいけれども、辛い目に合うのではないかとの、心配からキリスト教に入れない』

と言う方もいます。 イエス様は、ご自身が十字架の道を歩まれるだけに、弟子達にも、十字架の道を覚悟させておられるのですが、イエス様は決して、負えないほどの十字架を負わされるお方ではありません。
マタイ11章30節に、

「わたしの軛(くびき)は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」

と言っておられます。

それは、イエス様が共に軛を負って下さるからです。 何よりもイエス様は、復活して天に帰られる時、マタイ、28章20節で、

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

と約束して、天に帰られました。 私達の地上の旅路においては、聖霊に依って共におられ、永遠の御国へ導き入れる保証となって下さっています。 その事を信じて、地上の迫害を乗り越えて天の国に帰っていったキリスト者が、キリスト教の歴史の中に輝いています。

マキシミリアン・コルベ神父は、母国ポーランドで、「汚れなき聖母の騎士会」という修道会に属して、文書伝道を通して、キリストの福音と聖母の愛を教え、人々に伝道していました。
1930年（昭和5年）神父は36歳の時、東洋への宣教を夢みて、3人の修道士と共に、長崎にやってきました。 極貧の中で、冬は火も無く、パンとお茶だけの生活で、日本語版【汚れなき聖母の騎士】を創刊、発行して、福音を伝えました。

1936年にポーランドに帰国して、修道院長の働きに就きました。 帰国3年後の、1939年9月、神父が45歳の時、ナチス・ドイツは、ポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まり、修道院も破壊され、コルベ神父を初め、神父や修道士達は収容所に送られました。 一度は釈放されたのですが、1941年2月に、再び逮捕され、投獄

されました。 その年の5月、神父はアウシュヴィッツ収容所に送られました。

病弱な身体に、重労働を強いられ、暴力と暴言を受け、仕事が出来ない身体になると、名ばかりの囚人病棟に移されました。 収容所には、一つの厳しいルールがありました。 それは誰かが脱走したならば、無作為に10人を選んで、餓死刑に処すると言うものでした。 1941年7月末、点呼の時に1人の姿が見えません。 翌日も見つからなかったために、ルールに従って処罰される事になりました。 無作為に10人が引き出されました。 10人は何の抵抗もできません。 ところがその中の一人、ポーランド人の元軍曹が、すすり泣きながら、

「さようなら。 ああわが子に会いたい」

と叫んだのだそうです。 すると、コルベ神父は、前へ進み出て、

「聖職者である私には、悲しむ妻も、子も居ません。 私がこの父親の身代わりになります」

と、自分を差し出したのでした。 10人は地下にある、小さな部屋に閉じ込められ、一滴の水も、一切れのパンも、与えられる事も無く、放置されたのでした。 3週目に入り、コルベ神父は、まだ命が保たれて居ましたが、1941年8月14日に注射で命を絶たれました。

同伴した通訳者によると、弱り切った身体ながら、自ら腕を差し出し、穏やかに天に召されたのだそうです。 神様は、コルベ神父を御国に迎え、

「善、且つ忠なる僕よ」

とお褒めになり、地上の労苦を償って余り有る祝福をお与えになったに違いありません。

この様に、現実のこの世界は尚、罪に満ちていて、キリスト者を苦しめます。 しかし、コルベ神父を初め、この世の迫害を乗り越えて、天の御国へ辿り着いた聖徒たちの信仰が、歴史の中に、星のように、輝いています。 彼らの労苦の実を、私たちは今、受けている事を忘れては成りません。 何よりもイエス様が十字架の贖いを成し遂げて、天の御国への道を開き、御国へ辿り着く事を待っていて下さいます。 私たちの帰るべき本国は、永遠の天の御国です。 どの様な時も、この一事を忘れては成りません。
私たちの弱さは、イエス様が一番ご存知です。 折りにあう慰めと、助け、励ましを与えて導いて下さいます。 聖霊も、力を注ぎ、助けて下さいます。

要は、私たちが天を見上げ、帰り着くべき故郷を見据え、奪い去られる事の無い、天の価値観をしっかり握って、天の故郷を目指して、乗り越えて行くかどうかです。 人の目から見て、地上の旅路はどうであろうとも、天の御国に辿り着く事が出来るように、イエス・キリストを頭とする教会の交わりの中で、互いに祈り、励まし合い、助け合いながら、共に御国への道を歩んで参りましょう。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

私たちは、イエス・キリストの十字架の贖いによって、罪のこの世から救われた者でありますが、今また、この世に遣わされている者です。

弱い私たちは、この世の攻撃を恐れますが、天を見上げ、永遠に奪い去られる事の無い祝福を望み見て、天の価値観に立ち、聖霊の導きを求め、神様の御心に生きる者と成らせて下さい。

救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。